
コードギアス 反逆のルルーシュ ~ 銀の翼 ~

じゅげむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 反逆のルルーシュ 〈銀の翼〉

【Nコード】

N1377Z

【作者名】

じゅげむ

【あらすじ】

神聖ブリタニア帝国の植民地となった旧日本・エリア11にある極秘研究所から脱走した2人の少年レイと少女ジル。彼らはいったい何者なのか・・・？そして彼らが関わる世界の行方は？コードギアスのもう一つの物語。

TURN 00 【プロローグ】

【旧日本・エリア11・極秘研究所】

「くっ……！！例のカプセルが奪われたっ！！急げっ！！なんと
しても取り返すんだっ！！」

研究所内ではけたたましいアラーム音と、それに負けじと声を張り
上げる軍人の姿があった。

彼の名はバトラー。

神聖ブリタニア帝国第3皇子クロヴィスの命で、こここの管理、隠蔽
をしている将軍であり科学者でもある。

「……殿下にお伝えせねば……………」

バトラーの顔には焦りの色が浮かんでおり、その事態の深刻さがう
かがわれる。

そうして彼は踵を返し、その研究所を後にしようとした。

しかし突如奥の一室が爆発した。

驚いて彼は振り返った。

「なっ……!!まさかっ……!!」

バトレーの顔の焦りは瞬く間に恐怖へと変わる。

そしてその爆発音を聞きつけた十数人ほどの兵士が銃を構えて駆けつけた。

するとその爆煙から姿を現したのは、銀髪で綺麗なアメジスト色の瞳をしている全裸の2人の少女と少年だった。

しかし目はどこか虚ろで、まるで心がない人形のようにだった。

「ああ……そんな……まだ不完全だと言っのに……」

バトレーは絶望的な声を出して思わず後ずさった。

その様子を見た兵士たちは、あの2人がどんな人間かはわからなかったが、相当まずいものだということは理解できた。

すると突然彼らは何かにとりつかれたように、床に落ちていた鋭いガラス片をひっつかみ、兵士たちにむけて走り出した。

「うっ!!うて!!うてえっ!!」

バトレーはそう命令すると、いちもくさんに走ってその場を立ち去る。

目の前の2人に無我夢中で発砲する兵士はそれに気がつかない。

しかも2人はその銃弾に当たっても何事もないようにこちらに突っ

込んでくる。

「なっ！！なんで死なないんだああっつ！！！！！！」

その光景に兵士たちは恐れを抱き、後ずさりをしながらさらに発砲を加える。

そして2人は彼らの元へ行き着くと、次から次へと手に持った鋭利なガラス片で彼らの喉元を掻き切っていく。

「やっ！！やめてくっ……があ！！！！」

その場で何度も悲鳴があった。

数分後、いつの間にか辺りは血の海と化し、兵士は皆息絶えていた。そして2人は何事もなかったかのようにその場を後にした。

T U R N 0 1 【名もなき少女】（前書き）

誤字・脱字の指摘お願いします。

【トウキョウ租界 アシユフォード学園】

「はあ・・・はあ・・・」

一人の少女が所々血に染まった白衣のみをまとって走っていた。
彼女は銀色の髪をなびかせ、何度も後ろを振り返り、まるで何かから逃げているようだ。

とにかく遠くへ・・・

その考えだけが今の彼女を突き動かしていた。

しかしそんな彼女を突如めまいと頭痛が襲い、その場で思わず立ち止まり嘔吐し、そのまま彼女は倒れ込んでしまった。

視界が霞み、意識が遠のいていく・・・

そうして彼女は意識を失った。

数時間後・・・

「ん・・・ん・・・」

彼女がゆっくりと目を開けると、そこは見知らぬ天井だった。辺りを見渡すが、ここがどこだかさっぱりわからない。

部屋は質素で、きちんと物が整理整頓されている。

クローゼットに掛かっている服からすると、どうやらここは男性の部屋のようなのだ。

そして彼女はベットから起きあがると、窓辺へと歩み寄り、そこから外を眺めると、学生らしき人たちが楽しそうに話しながら歩いていた。

すると突然その部屋のドアが開いた。

「ちよっ！！あなたそんな格好でっ！！」

「えっ・・・？」

自分の体を見ると、なぜか全裸だったが、彼女は全く気にしている様子はなかった。

あわてて彼女に駆け寄り寄る金髪の女性・ミレイ・アシユフォードは、

部屋のカーテンを閉めた。
彼女の手にはバスローブがあり、どうやらこれを取りに行っていたらしい。

「ダメじゃない！まだ安静にしてなくちゃ！」

「あつ……はい……ここはどこですか？」

自分にバスローブを着せて、強引にベットまでひっぱり寝かしつけるミレイに、彼女は訪ねた。

「ここはアシュフォード学園のクラブハウスよ……あなた名前は？どこからきたの？」

「……………」

思わず彼女は考え込んだ。
なぜかうまく思い出せない……
いったい自分は何なのだろうか？

「名前は……ジル……………でもそれ以外は思い出せないんです……………」

「もしかして記憶喪失？」

「たぶん……」

「そう……ファミリーネームは？」

「……わかりません……」

「そっかぁ……あつ、ちなみに私はミレイ・アシユフォード！この学園の生徒会長兼理事長の孫娘！よろしくっ！」

ミレイは明るい笑顔をジルに向けながら言った。
どうしてこんな自分をここまで世話してくれるのか彼女は不思議だったが、それをきくのは何故か失礼のような気がしたので、きくのはやめた。

「あ……私はどうしてここへ？」

「あなたはね、血だらけの白衣だけを着て学園の庭に倒れていたのよ？あなたに怪我はないようだけど……覚えてない？」

「いえ・・・全然・・・」

怪我がないのに血まみれ？

じゃあ自分はだれかを殺してしまったのか？

そんな考えがジルの脳裏によぎる。

もしそうだとしたらこんなところにはいられない。

このミレイという人にも迷惑をかけてしまう・・・

そして彼女はここから立ち去る旨を伝えようとすると、それより先にミレイが口を開いた。

「心配しなくても大丈夫よ・・・一応警察には届け出たし、確認も取ったからあなたが犯罪に関わっていたという事実もないわ」

ミレイは優しい声で、彼女の頭を撫でながら言った。

ジルはそれを聞いて安心した。

その様子を見たミレイは、突然話を切り出した。

「ジル、あなた行くところがないならどう？ここに住んで学校に通わない？どうせ身元引き受け人も必要だし、御爺様にも話はしておくから」

「いや・・・私は・・・その・・・ミレイさんやこの学校の人たちにも迷惑がかかってしまうかもしれない・・・」

「いいのよ！そんなこと気にしなくて！あなたは悪い人には見えな
いしねっ？」

そういつてミレイはウィンクを飛ばす。

正直ジルは戸惑っていた。

自分がいることで、ミレイや、この学園の人たちに迷惑がかかるか
もしれない。

だがここを出たからといって行く当てもなく、記憶もないためどう
したらいいかわからない。

そんなことを悩んでいると、それを察したようにミレイは言う。

「あなたの記憶が戻るまでここにいればいいし、もしあなたが望む
なら、記憶が戻った後もここに居ていいのよ？」

彼女はベットに腰掛けてたジルの隣に座りながら肩を軽く叩く。
こんな優しい人に拾ってもらって良かったと彼女は思いながら、「
はい」と少し笑って返事をした。

「よろしいっ！じゃあ今からどうする？もう一眠りしてもいいわよ
？」

ミレイは満足そうに大きくうなずくと、そう提案した。

「いえ、もう大丈夫ですし・・・それに動いてた方が今は気がまぎれ

ますんで・・・」

「そうね・・・それなら一緒に今から生徒会のみんなに会いに行かない？丁度一人を除いてみんなクラブハウスにいるし、私も付きつきりって訳にもいかないから、勝手がわからないあなたのお世話も頼めるしねっ？」

「そんなっ！皆さんに迷惑ですし・・・」

「いいのいいの！会長命令だから！」

そういつてミレイはいたずらっぽく笑った。

そしてジルは「（きつとみんなこの人で大変な思いをしてるんだろうなあ）」と思うのであった。

そんな中突然部屋の扉が開いた。

「あ・・・ミレイさん・・・先ほどの女性の方の具合はどうですか？」

「さっき目を覚ましたところよ、ナナリー」

それを聞いたナナリーは「そうですか」と言って、車椅子を部屋の中へ進めた。

「あなたは・・・？」

ジルが首を傾げてたずねる。

「私はナナリー・ランペルージです、よろしく願いしますね？」

「・・・私はジル・・・よろしく」

「はい！ところで兄のベットで良かったのですか？私のベットの方が・・・」

「いいの！いいの！ナナリーは気にしない！」

ミレイはなにやらニヤニヤしていたが、ジルとナナリーがそれに気がつくことはなかった。

そしてジルはナナリーの特別な雰囲気を感じ、たずねようか迷ったが、後々に何か不都合があつてはいけないので、思い切つてきいてみた。

「あの・・・ナナリー・・・あなたは・・・」

「はい・・・私は目と足が不自由なんです・・・」

ナナリーは、ジルがたずね終える前にそれを打ち明けた。
そんな彼女の表情はやはり暗く、悲しい物だった。

「そう・・・私にできることならいくらでも手伝うから、よかったら頼ってね？」

ジルは笑顔でナナリーにそう言ってしまい、自分らしくないなと思ったが、記憶がなく、自分を知らないのに、そんな風を感じたことが不思議だったが、嬉しそうに「はい！」と笑顔でうなずく彼女を見て悪い気はしなかった。

そしてそんな中ミレイが突然話に割り込んできた。

「そうよナナリー、ジルも今日からここに住むんだから」

「えっ!?!」

思わずナナリーとジルがハモる。

「ナナリーもルルーシュ以外に誰かいた方が楽しいでしょ？」

「それは・・・そうですね・・・」

「部屋はもう一つあるし、ルルーシユには私から説明しておくわ、それに彼女は記憶喪失で行くあてがないのよ」

「記憶喪失・・・？そんなんですか・・・あの、こんな私なんて迷惑がかかると思いますが、よろしく願いしますね？」

「えっ・・・？あつ、よろしく願いします・・・」

勝手に進んでいく話を止めるすべはなく、ジルは少し困ったが、別に不満なことはなく、むしろありがたかったので、その提案を受けらることにした。

「じゃあ今から生徒会室に行くけど、ナナリーは？」

「そうですね・・・特に用事もないので一緒にします」

「なら決定っ！生徒会室にレッツ・ゴー！..!」

「じゃあナナリーの車椅子は私が押すね？」

「あっ、はい、お願いします」

なぜかハイテンションなミレイを先頭にして、ジルはナナリーと車椅子を押しながら部屋を出た。

そしてその夜にルルーシュがベットで寝ようとする、なぜか良い匂いがしてなかなか寝付けなかったというのはまた別の話……

【クラブハウス・生徒会室】

「ねえ……さっきの子、大丈夫かなあ？」

「シャーリー心配しすぎだって、怪我は別になかったんだろ？」

「うん……でも服は血だらけでまるで撃たれたみたいにかくさん穴が空いてたし……」

「そんな穴だらけになるほど撃たれてたらその子とつくに死んでるって!」

「・・・そうだね」

ここはアシユフォード学園生徒会室。

その中でオレンジ色の髪の少女、シャーリーと、青い髪の少年、リヴァルが、数時間前に見つけた少女について話していた。

発見者はシャーリーで、その後、ミレイと一緒にルルーシユの部屋に（半ばミレイの嫌がらせで）運んだのだ。

ちなみにシャーリーはその時、ルルーシユの部屋に全裸で寝かせた少女を羨ましいとか思ったり、なにか興奮したりで、いろいろと悶々していたというどうでもいい情報も付け加えておこう。

一方リヴァルはルルーシユに置いてきぼりにあい、一人寂しくバイクを押していたのであった。

「でもその人危険じゃないの・・・?」

近くの別の机でパソコンのキーを叩いていた緑色の髪をしたメガネをかけた少女、ニーナが不安そうに2人にきいた。

「一応警察には届けたし、それにそんな事件は起こってないって言うってたから大丈夫だよ!」

「うん・・・」

シャーリーの言葉を聞いて安心したニーナはホツとした。そしてそんな時、部屋の扉が開き、ミレイが入ってきた。

「会長！あの子は！？」

「大丈夫よ、さっき目を覚まして今ここにいるわ・・・入ってきていいわよー？」

そういつてミレイが呼びかけ、一歩右に寄ると、その後からナナリーのと車椅子を押しながら、バスローブを着た銀髪のアメジスト色の瞳をした少女が入ってきた。

それを見たリヴァルは「わぁお・・・」と言ってしばらく見とれていた。

「私、シャーリー・フェネット！水泳部兼生徒会役員！よろしくね！」

シャーリーはジルの元に駆け寄ってきて手を握りあいさつをした。

「あっ！オレはリヴァル・カルデモンド！書記ね！」

彼女に見とれていたリヴァルはハッ！としてあいさつをする。

「あつ・・・あの・・・ニーナ・アインシュタインっていいます・・・」

なぜか顔を真っ赤にしてもじもじしながら自己紹介をするニーナ。

「私は・・・ジル・・・」

急なことに戸惑いながらも自己紹介をする。
そしてそんな彼女をカバーするようにミレイが付け加える。

「あのね、彼女、記憶喪失なのよ」

「「「えっ!?!」」」

ミレイの発言に驚く3人。

「それでね、私ひとりじゃ彼女が困ってる時の手助けにも限界があるから、あなた達にもお願いしたいの」

「もちろんですよっ!」

「まかせてくださいっ会長!」

「うん・・・」

「よっ、よろしく・・・」

快く引き受けてくれた3人に、ジルは頭を下げた。

「そーだっ!! 彼女、ファーストネームはあるけど、ファミリーネームがないの・・・でもそれじゃなにかと不便もあるだろうから、みんなで決めようっ! ってことだっ!」

そういつてミレイはジルと3人を座らせ、ナナリーの車椅子を机によせると、「今日の議題は、ジルちゃんのファミリーネームでえーっす!」となにやら勝手に会議を始めた。

「じゃあ、だれがいい案がある人っ!」

「はいっ！」

ミレイが発言を促すと、まずはシャーリーが手を挙げた。

「私は『バレンタイン』がいいと思いますっ！」

「つまり・・・ジル・バレンタイ・・・いやいやっ！それはいろんな意味でまずいでしょっ！？某ゲームをまるまるパクってるし！」

というわけで即却下。

そして次に名乗りを上げたのはリヴァル。

「オレは『ヴィルヌーヴ』が良いと思いますっ！」

「ジル・ヴィルヌー・・・ってそれもいろいろまずいわよっ！F1のレーサーじゃないっ！！」

これも即刻却下。

そして次にニーナ。

「えっと・・・私は・・・」(あまりの内容に自主規制させていただきます)『「」

「だめ！だめ！だめ！ぜーっただめっ！……！」

いろいろとツッコミ疲れて呼吸が荒いミレイ。
そして最後にナナリー。

「そうですね……『フランゾワース』なんてのはどうでしょうっ？」

「いいわねっ！流石ナナリー！！どっかの3人とは大違い！」

ミレイに褒められたナナリーは嬉しそうに頬を赤らめる。

「あなたはどつ？これでいい？」

「はい、なんかお花の名前みたいですよきです」

「よしっ！なら決定！あなたの名前は今日から『ジル・フランゾワース』だっ！！」

満足そうにミレイはうなずいた。

そんな光景を見ていたジルは、なんだかおかしくなり笑い始めた。

すると他のメンバーもそんな彼女につられて笑い出すのであった。

その夜・・・

ジルはナナリーと一緒に夕食を食べていた。

ルルーシュが今夜は遅くなるとシャーリーに伝言していたので、先に食べることにしたのだ。

「へえ、あなたのお兄さんってそんな人なんだ」

「はい、料理なんかもすごく上手なんですよ？」

そうして2人が談笑していると、部屋の扉が開いて、黒髪でアメジスト色の瞳の少年、ルルーシュが入ってきた。

「ただいまナナリー」

「おかえりなさいませ、お兄様」

ナナリーは彼を笑顔でむかえた。
そして彼も笑顔を返すが、どこか疲れて、思い詰めているようだった。

「あっ・・・あの・・・」

「大丈夫、会長から話は聞いてるよ・・・オレはルルーシュ・ランペルージ、よろしく」

「あっ、ジル・フランゾワースです・・・よろしくお願いします・・・」

「ああ・・・じゃあオレは先にシャワーを浴びてくるから、ゆっくりしてくれ・・・」

そういつてルルーシュは部屋の奥へと消えていった。

ジルは何かを彼に感じ、その後ろ姿をしばらく見つめていた。

TURN 01 【名もなき少女】（後書き）

ホントはもう少し書きたかったですね・・・

でもただら引きずってたらなんかめちゃくちゃになっちゃいそつ
だったんで・・・w

てか途中からネタでしたね。

バイオハザードはどうしてもいれたかったんですよっ！

そうしたらもう・・・結果は見事に・・・w

次話はもう一人の少年のお話ですっ！！

どーぞお楽しみにっw

TURN 02 【悪魔の目覚め】(前書き)

誤字・脱字の指摘、よろしくおねがいします

【特別派遣嚮導技術部・倉庫】

「ふんふんふんふんふん」

一台の大型車両の横で、どこか拍子ぬけた雰囲気のメガネをかけた男　ロイドは、鼻歌を口ずさみながら、上機嫌で目の前のパソコンのキーを淡々と叩き続ける。

彼はブリタニアの宰相であり、第二皇子シュナイゼルお抱えの特別派遣嚮導技術部、通称『特派』の主任研究員である。

そんな彼がなぜこんなにも上機嫌なのかというと、原因は彼の開発したNMF、ランスロットにあった。

この機体は、世界で唯一の第七世代型NMFであるのだが、あまりにハイスペックを追求したため、今までこれに乗りになすデバイサーがいなかった。

しかし、先ほどのシンジユクでの事件の際に、素晴らしいデバイサー（パーツ）を見つけたのだ。

それは、枢木スザクという、イレブン、もとい名誉ブリタニア人だ

が、自身の自信作であるこの機体を乗りこなす人間なら、正直彼は誰でもよかったのだ。
そしてロイドはそんな中から得られた戦闘データを解析している最中なのだ。

ガラガラ・・・ガツシャーンツ!!!

そんな中、突然倉庫の奥の方で大きな物音がした。
ロイドはその物音に驚き、ぶつぶつと文句を言いながらも、気になつて様子を見に行った。
するとそこには血だらけのボロボロの軍服だけをまとつた少年が倒れていた。

「あはあ！セシルくん〜!!」

ロイドはまるで何か面白いおもちゃでも見つけたかのようにその少年を見ると、大声で倉庫に止まっていた大型車両の中にいる人間を呼んだ。

そして中から出てきたのは同じ特派の研究員兼ロイドのお守り役である女性 セシルである。

「はい！なんですか、ロイドさ・・・ってキャアアー!!」

呼ばれたセシルがひょっこり顔を出すと、そこには少年が横たわっ

ており、思わず彼女は悲鳴をあげた。

「ちょ…大丈夫なんですかつ!？」

慌ててかけより、脈を計るセシル。
どうやら生きてはいるようだ。

「いつ!急いで医務室へ!!ロイドさんっ!!」

「へっ?」

「手伝ってくださいっ!」

「ええ…なんで僕が…」

「何かいいました?」

「い…いえ、なにも…」

めんどくさそうに言ったロイドにセシルが笑顔で脅す。
それを見た彼は、一瞬背後にこの世の思えないものが見えた気がした。

そして渋々ながら、ロイドは少年の両肩を、セシルは両足を持ち上げ、半ば引きずりながら、倉庫に設置された簡易的な医務室へと運ぶ。

「酷い・・・服にこんなにも穴が・・・きつと誰かに撃たれたんですね・・・」

「ええ、でも傷1つないよ？彼」

「えっ？」

ロイドが少年の着ている服をめくり上げて、内側の身体を見る。

それを聞いたセシルも、ロイドの隣から覗き込む。

確かに、服にはたくさん銃弾の跡と、大量の血液が付いているのにも関わらず、彼には一切の傷がない。

撃たれて死んだ誰かの服を着た、という考えもあるが・・・

「とにかく警察に・・・」

「あはあ、でもこの子、軍の制服を着てるんだから、こっちで軍のリストから洗った方が早いんじゃない？」

「あつ、確かに・・・じゃあさっそく調べてみます！それで、この

子は・・・?」

「まあ目が覚めるまでここに寝かせておけばいいよ」

「わかりました」

そういつてセシルはパソコンを取りに一度、車の中に戻った。
そしてロイドは興味深そうにその少年を見ていた。

2人の男が、木製の小舟に乗って海を漂っていた。

1人は甲冑を着た銀髪で、アメジスト色の瞳をした男。

彼の目はどこか虚ろで、遠くの何かを見つめているようだった

もう1人は、黒いマントに身を包み、フードを深くかぶっているため顔が見えず、男か女かも不明である。

辺りは濃い霧に包まれ、1m先すら視界がきかない。

しかし小舟は誰かが漕いでいるわけでもないのに、まるで目的地を知っているかのようにゆつくと進んでいる。

そしてしばらくすると大きな揺れが小舟を襲った。

どうやら浅瀬に乗り上げたようだ。

2人が小舟から降りると、脛の辺りまで足が海水に浸かった。

少し歩くと、小さな浜辺に辿り着き、その奥には森が生い茂っていた。

すると突然、銀髪の男の顔が怒りに歪んだ。

声は聞こえないが、彼はもう1人の方を振り返り、何かを怒鳴っている。

もう1人の口元は見えないが、会話をしているらしい。

彼は怒鳴るのをやめたが、まだ顔は怒りに満ちている。

しかし、だんだんと顔から血の気が引いていき、青ざめてゆく。

そしてもう1人の男は引き返していき、霧の中へと消えた。

取り残された彼は、踵を返し、森の中へ入っていった。

どのくらい歩いただろうか？

目の前に突如、開けた場所が現れ、奥には洞窟があった。

彼は何か得体のしれないものを感じ、帯刀していた剣　つるぎを抜いた。

警戒しながら、ゆっくりと洞窟の中に足を進める。

だがそこにはただ一つ、大きな石の扉のようなものがあるだけだった。

その扉の真中には、鳥のような不思議な紋章が彫られている。

彼はその扉に恐る恐る近づき、手を伸ばしす。

そしてその手が触れた瞬間、辺りは眩い光に包まれた・・・

「!!!!!!!!痛っ!!!」

「ひでぶっ!!!」

そこで彼は目を覚ました。

そして勢いよく起き上がったせいで、彼を覗いていた男と頭が正面衝突した。

どうやら今までののは夢だったらしく、痛みで現実に戻された。

そんな彼と同じように痛みでその場につずくまる・・・それはロイドだった。

「どうしたんですかっ!?!」

ロイドの奇声を聞いたセシルが慌ててかけつけた。

「・・・な・・・なんでもないです・・・」

ロイドが涙目で答える。

「し……ごめん……」

同じく涙目で頭を押さえる少年。

「い……いいよ……覗いてた僕も悪いし……でも、もうちょつと起きるタイミング考えてよ……」

「それよりあなた、大丈夫？」

「あのおく……僕の心配は……？」

セシルは痛がるロイドを半ば無視して少年に駆け寄る。

「あなた、名前はなんて言うの？」

「名前は……レイ……でもファミリーネームはわからない……」

「わからない……？じゃあどこから来たとかは？」

レイは必死に思いだそうとする。

しかし目を覚める前の記憶が一切わからない。
一体自分は誰で、なぜここにいるのか……

「君はその服を着てこの倉庫に倒れてたんだよ？」

痛みから復活したロイドが、脇の机に置いてある血だらけでボロボロの軍服を指差した。

「……全然」

「そう……記憶喪失なのかしら……あつ、私はセシル・クルーミーよ……そしてこっちがロイドさん」

「どお〜もお〜」

ロイドはヘラヘラしながらズイツと彼に顔を寄せた。

「あのさあ〜、君、NMFの騎乗経験は？」

「……はい？」

「ロイドさんっ!」

「いいじゃない、この子がもしNMFのパイロットならそれがきつかけで思い出すかもよお?」

NMF・・・記憶はないが、なぜか操縦の知識だけは頭に残っていた。

そして悪びれもせずロイドは話を続ける。

「君が気絶してたときにいろいろ調べさせてもらったんだけど、なかなかいい体つきだし、一回シュミレーターしてみない?」

「いいの・・・?」

もし自分がNMFのパイロットであったなら、ロイドの言うように、記憶を取り戻すきっかけになるかもしれない・・・

「待つてくださいロイドさんっ!そんな誰かもわからない一般市民に「大丈夫大丈夫!主任は僕だし、いざとなったら責任もとるから」

そしてセシルの反対を強引に押し切り、レイのNMFシュミレーションは決定した。

1時間後
…

『どうレイ君？準備はいい？』

「いいですよ、M S・セシル・・・」

彼は黒のパイロットスーツに身を包み、シュミレーターのコックピットに座っていた。

操縦知識はあったが、念のために教本も読んだ。

するとそこにはM V Sやブレイズルミナスなどという見たことのない知識もあつたので、見ていて正解だな、と彼は思っていた。

おそらく新システムなのだろう。

2人に詳しく話を聞くとところによると、特別派遣嚮導技術部は、兵

器の開発を目的としているのだから、当然と言えば当然なのだが・

『今回、レイ君が使用するナイトメア「Z-01 ランスロット」、
私たち特別派遣嚮導技術部が開発した、世界で唯一の第七世代型N
MFよ』

『まあつまりは僕の最高傑作ってこと』

セシルの通信にロイドが割り込む。

彼女は、いきなりこんなハイスペックな機体でシュミレートするな
んて・・・と思いつつロイドを見たが、彼の顔にはそんな心配事は
一切見えない。

そんなロイドを見た彼女は、諦めて話を続けた。

『では、今回のミッション内容を説明します。戦場は市街地を想定
し、敵はサザランドが4体、これを制限時間10分以内で撃破し
てください』

「りょーかい」

『レイくん、ここは「イエス・マイロード」って言ってもらわな
きゃ気分がでないでしょ〜?』

「（シユミレートに気分は必要なのか・・・？）」「と思いつつ」「今度から気をつけます」とロイドに返事をして、操縦桿を握った。

『では、これよりシユミレートを開始します』

セシルの合図とともにブザーが鳴り、敵のサザーランドが現れた。

「すっ・・・すごいですね・・・」

「おお・・・」

シユミレート画面を外で見ていたセシルとロイドはその様子に驚いた。

というのもほんの一瞬で勝負がついたのだ。

目の前に現れた4機のサザーランドの斉射を掻い潜り、大きく跳躍した後、ハーケンを飛ばしながら両腕に持っていたMVSを投げて4機全てを一瞬で沈黙させた。

制限時間は9分46秒も余っている。

「適合率92%・・・」

「でもスザク君には及ばないかあ」

セシルはその高い数値に驚き、ロイドは少し残念そうに言った。

『あの……これで終了……?』

レイから通信が入る。

声からは物足りないといった雰囲気を感じ取られる。

「あなたがまだ続けたいなら続けてもいいわよ?」

『じゃあお願いします……それと……もっとレベルを上げてもらえる?』

それをきいたロイドはなぜか笑いだし、セシルは何とも言えない顔をしていた。

「じゃあ一気に上げるわよ?」

『お願いします』

ミッションナンバー？

戦場：市街地

敵部隊：サザールランド28機、機動戦闘車54台

制限時間：50分

とシュミレーターのコックピットの画面に表示され、開始のブザーが鳴った。

それと同時にどこからともなく十数機のサザールランドが現れ、彼のまわりを囲み、アサルトライフルで撃つ。

しかしそれがランスロットに当たることではなく、右腕のハーケンで宙に飛びあがり、素早くそれを巻き上げると、正面にいた2機のサザールランドに再びハーケンを発射した。

すると見事二つとも命中し、そのまま地面に崩れおちたサザールランドに食い込んだハーケンを巻き上げると、勢いよく地面に降下し、脇にいた別の2機のサザールランドをMVSで真つ二つにする。

しかし、さらにその後ろから残ったサザールランドが銃弾を放ち、援軍として何十台もの機動戦闘車がランスロットに迫る。

それを見たレイはシールドで防ぎながら一度狭い路地に逃げ込み、サザールランドがそれを追いかける。

ランスロットはランドスピナーを使い、両脇のビルを昇っていくと同時に、MVSで側面を壊していく。

その下にいたサザールランドはアサルトライフルを上に向けてるが、落ちてきた瓦礫に潰されてしまった。

追ってきた大半のサザールランドはがれきの下敷きになったが、まだ数機生き残っており、ランスロットはそれらに向けてハーケンを放

ち、無力化していく。

そしてその狭い路地からだと、待ち伏せしていたようにサザールンドがスタントンファをランスロットに叩きこむ。

だがそれをしゃがんで避けると、脚部をMVSで切り捨て、持っていたアサルトライフルを奪い、それでコックピットを打ち抜いた。

『すごいねえ、君』

突然ロイドが通信を開く。

「そうですね？まあ機体のおかげってのもあるんですけどね」

謙遜するレイだが、何故か笑顔である。

しかもロイドと会話しながらも次々とサザールンドや機動戦闘車を破壊していく。

彼は自分がこれほどまで出来るとは思っていなかった。

しかもこの機体は素晴らしい。

まるで自分の手足のように思い通りだ。

「フフフ・・・」

思わず笑い声が漏れる。

そして結局彼は全ての敵をノーダメージの中20分で無力化し、シユミレートを終えた。

「いやあ、君も最高だねえ」

シュミレーターから降りた彼にロイドが言った。

「お疲れ様、でも本当にあなたはすごいわ……でも軍のデータにあなただの名前はなかったのに……」

セシルは彼に飲み物とタオルを渡しながら不思議そうに言った。
確かに彼女の言うとおりだ。

こんなにもNMFの操縦知識があるというのに、それを扱うブリタニア軍の騎士のリストに自分はいないのだ。

「（じゃあなんで僕はこんなに……）」

レイはどれだけ考えても答えは浮かばなかった。

そして彼は考えることをやめた。

所詮ただの記憶だ。

ないと言って別段問題になるわけでもない。

それに彼は自分の生きる道を見つけた気がした。

シュミレーターとはいえ、あの戦場の高揚感……

相手を破壊するたび心地がよかった。

そして彼は決めた。

「Mr・ロイド・頼みがあります」

「ん？なんだい？」

「僕をここに置いてください」

「いいよ」

「早っ！！」

ロイドの即答に思わずセシルがつっこむ。

「いやあ、だって彼も優秀なデバイサーだし、今度新しい子が一緒に自作のNMFを持つてくるから丁度いいんじゃない？」

「えっ！？そうなんですか！？」

「言っただけ？」

「きいてませんっ！！」

「あら失礼、ってことで君の身分はこっちでなんとかするから・・・
ひっ！ごめんなさいごめんなさいっ！」

あまりに適当なロイドについてセシルの堪忍袋の緒が切れ、ロイド
が目の前でポコポコにされていく。
レイはそれを見ながらこの先に大きな不安を抱えるのであった・・・

TURN 02 【悪魔の目覚め】（後書き）

戦闘シーンって難しい…うん。

さあ今度はもう一人の男の子の登場です。

こっちの方はなかなかつかみどころのないキャラを目指したんですけど…

それになぜか2話より3話の方が先に下書きができちゃったんですよw

でわ、最後までご愛読ありがとうございましたw

（いや、完結じゃないですからねっ!?!）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1377z/>

コードギアス 反逆のルルーシュ ~銀の翼~

2011年12月12日00時51分発行